



岡山高梁市の取組 コーディネーター配置の背景と変化

学校と地域をつなぎ未来を共創する - 「共助モデル」の実践事例

2026年1月15日 高梁市

岡山県高梁市の概要



岡山県の中西部に位置し、
2004年に1市4町が
合併して誕生しました。



市内の高等学校一覧

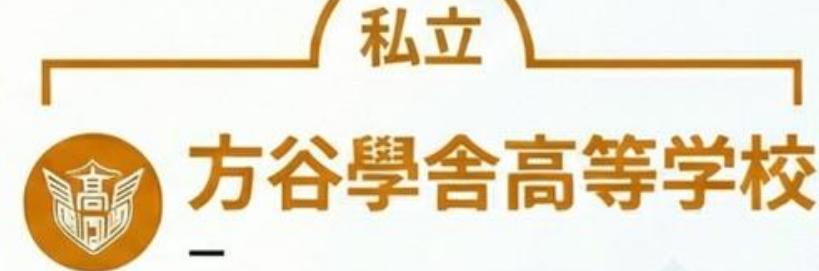
県立



市立



私立

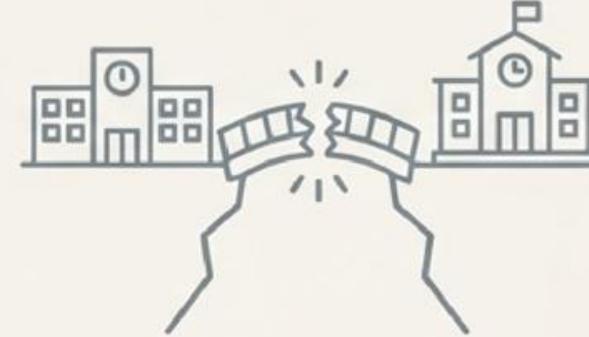


高梁市が直面していた危機と課題（2020年当時）



危機1：県立高校が 統廃合の崖っぷちに

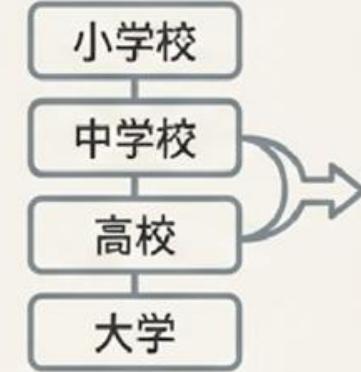
定員割れが続き、県の再編基準「2年連続で新入生100名以下」に抵触する危機的状況。特に高高梁城南高校は、県内で最も再編リスクが高い高校の一つだった。



危機2：学校と地域の 連携が 不十分

教員の多くが市外からの通勤者で、地域ネットワークが不足。「総合的な探究の時間」は校内での調べ学習に留まり、地域連携が形骸化していた。

※特に高梁高校



危機3：小・中・高・大 の「縦の連携」が欠如

中学校教員が市内高校に持つ20年以上前の古いマイナスイメージ（例：「荒れている」）が払拭されず、生徒の市外流出を助長していた。

解決の鍵 → 学校と地域をつなぐ専門人材＝コーディネーターの配置

地域教育コーディネーターに求められる3つの機能

① コーディネート機能

学校と地域をつなぐ「橋渡し役」



関係機関とのマッチングを行います。

地域教育コーディネーター

② フシリテート機能

対話の場を創り出す「進行役」



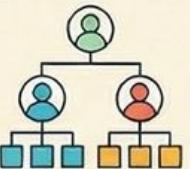
参加者の主体性を引き出し、意見をまとめて結論を導きます。

③ マネジメント機能

プロジェクトを動かす「運営役」



予算獲得、



組織構築、



人的資源の最適配分を設計します。

高梁市が直面していた課題をコーディネーター配置により解決

高梁市が直面する3つの教育課題

県立高校が統廃合の危機



定員割れが続き、県の再編基準に抵触する深刻な状況。

学校と地域の連携が機能不全

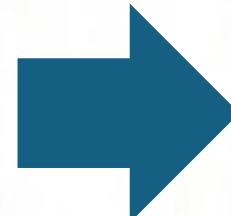


教員の市外運動者が多く、地域ネットワークが不足している。

小・中・高・大の「縦の連携」が欠如



中学校教員の古いイメージが市外への生徒流出を助長。



解決の鍵：教育コーディネーターの3つの機能



コーディネーター



- ① つなぐ(コーディネート機能)
学校と地域の人材や資源を発掘し、マッチングさせる。



- ② 引き出す(ファシリテート機能)
対話の場を設け、参加者の主体性を引き出し合意形成へ導く。



- ③ 動かす(マネジメント機能)
行政や企業を巻き込み、予算や継続を設計・運営する。

信頼から生まれた役割の進化

コーディネーターの役割は、最初から大きな計画として始まったわけではありません。現場での小さな成功と信頼関係の構築を通じて、徐々にその必要性が認められ、公式な役割へと進化していきました。



2020年12月に
東京から移住
学校現場に携わり始める



2020年～GIGAスクール立ち上げ時の現場支援



2021年度 高梁高校の探究サポート（ボランティア）

2020.12

市内小中学校の「GIGAスクールサポーター」として勤務開始。城南高校生のクラウドファンディングを支援。

2021.04

高梁高校の校長からの依頼で、「探究コーディネーター」としてボランティアで関与開始。

2021年度

「高梁市の県立高校の在り方を考える会」にオブザーバーとして参加。市と高校の連携を探り始める。

2022.04

高梁市から正式に「学校連携コーディネーター」として業務委託を受け、活動を本格化。



信頼の積み重ね



コーディネーター配置後の成果



危機からの脱却：行政との連携強化と支援体制の構築

コーディネーターの働きかけにより、市の行政が県立高校支援に本格的に乗り出しました。具体的な支援体制が次々と構築され、学校存続の危機を回避しました。

市の主な取り組み



2022年：「県立高校魅力化推進プロジェクトチーム」を市役所内に設置。



2023年：県立高校への予算化された支援（全国募集強化費、広報費等）を開始。



2024年：市外からの通学費補助を決定。県立2校と「包括連携協定」を締結。



2025年：高校生が市の職員として活動する「高校生みらい共創課」が発足。

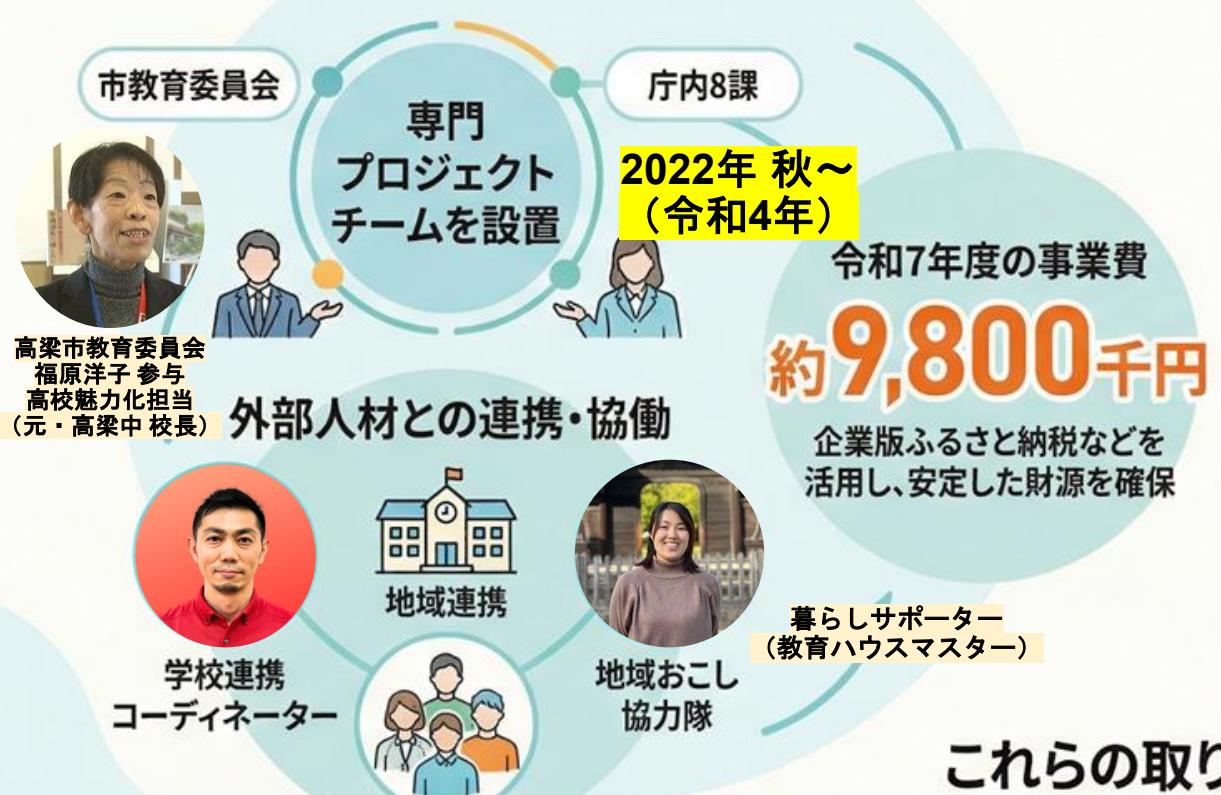
成果：高梁城南高校の奇跡的な回復



高校魅力化へ！高梁市の挑戦

市外からも生徒を惹きつけるための組織的体制と具体的な取り組み

魅力化を支える市の推進体制



生徒を惹きつける主な取り組み

特色ある学校づくり



「方谷学」の探究学習
DXハイスクール事業

地域との協働学習



Jona Caféの運営



「みらい共創チャレンジ」

市外からの生徒も安心な環境整備



通学費の一部補助



「暮らしサポーター」の配置

これらの取り組みを通じて、
「市内外から通いたい学校」を目指します。

高梁市が取り組む高校魅力化と支援

市外からの通学費の補助 (バス・JR)



高校生の探究活動等に 最大10万円助成



地元企業（天満屋）による 授業や部活動の充実化



高梁市が取り組む高校魅力化と支援

包括連携協定締結（R6年12月）
高梁市と県立高校 2校



「総合的な探究の時間」と連動
高梁高校・高梁城南高校の各1チームが
週1回程度、市役所で活動

「高校生みらい共創課」の設置
(R7年4月～)

高梁市役所
高校生
みらい共創課

2025年4月創設、スタート。

高梁高校・高梁城南高校の生徒が市役所に出席し、職員と協働・共創して、地域課題の解決に向けた方策を検討・提案・実践していく取り組みです。
※「課」のメンバーとして、好きなも交替されます。
※ 各校で1チームずつ選抜となります。



- ①探究学習の時間に市役所で活動
②市役所の職員と協働・共創
③地域課題に本気で取り組む

担当：高梁市役所 こども教育課・県立高校魅力化プロジェクトチーム



「総合的な探究の時間」と連動
高梁高校・高梁城南高校の各1チームが
週1回程度、市役所で活動

総合的な探究の時間の中間発表で「失敗の日」を初開催 (R6.10月)

岡山県立高梁城南高校

(電気科・デザイン科・環境科学科)



3年で学校の空気が激変 「冒険的な組織」へ変容

ワクワクと教員の「やってみよう」が溢れる高校に



学科の壁と閉塞感

応援し合う仲間に

高梁城南高校の魅力化の取り組み（一部）

工業系・農業系の従来型の学びのスタイルから転換 → 「私立のような面白い高校（地元中学生評）」

『失敗の日』の開催

失敗を前向きに捉え、
挑戦する学校風土への変貌

岡山県立高梁城南高校

総合的な探究の時間
第2回 中間発表&対話会
電気科・デザイン科・環境科学科 3学科のコラボ探究

失敗の日



「失敗おめでとう」

失敗と共に称え合い、失敗の価値を考え、
次なる挑戦への踏み込みを宣言する日

2025.10.22(水)

5-6時間目 13:30-15:20 会場 体育館

失敗の日とは、フィンランドの起業家が声を上げて制定された記念日で、
挑戦する文化を醸成するために、失敗を共有し、共に賞賛し合おう、という日です。

【プログラム（予定）】

- ・開会宣言
- ・失敗座談会（スペシャルゲスト登場！）
- ・探究活動の「失敗」発表（18チーム）
- ・失敗対話会（地域の方も混ざって）
- ・閉会宣言

地域の方・外部の方の参加歓迎！

▼申込フォーム



<https://forms.gle/lnGpVf5z4HGGVhvHa>

株式会社の設立

JONANホールディングス株式会社
商業系以外で全国初



3学科の専門的な学びや探究活動の企画をビジネス化！



地域から支援いただきたい資金

活動資金

最低限の運転資金
(15万円程度)

プロジェクトの原資に

法人登録料(年・月) 7.2万円/年

HP運営費用 2万円/年

決算申告費用 5万円前後

吹屋ブランドの新商品

デザイン科の生徒有志が制作

収益は次のプロジェクトの原資に！

活動資金の循環と自走

紹介動画をチェック！

<https://www.youtube.com/watch?v=jjcc4a-w9ac>

最新情報はHPをご覧ください

<http://jonan-holding.com>

JONANホールディングス株式会社 Email: jonan_holding@mail.com

岡山県立高梁城南高等学校 平716-0043 岡山県高梁市高梁北町1216 TEL 0866-22-2237 (校長代表番号)

JonaLaboの開設

校内の会議室をデジタルラボも改修



全国募集の広報強化 (地域みらい留学への参画)



教員と生徒が主役に：「ソフト&パワフル」な学校文化の醸成

高梁城南高校では、探究学習の導入が学校文化そのものを変えました。当初の不安を乗り越え、生徒と教員が自走できる体制が構築され、学校全体の雰囲気が劇的に変化しました。



生徒が主体に

「生徒が主体的に動き、試行錯誤し、時に失敗もしながら学びに変えていく」スタイルが定着。



「失敗の日」の開催

探究学習の中間発表会として、失敗を称賛し学びの機会とする文化を創造。



教員の自発的改革

有志教員による「勝手に戦略会議」が開催され、カリキュラムの抜本的見直しを議論。



新たなアイデンティティ

教員集団の新たな合言葉として「ソフト&パワフル（柔軟性と実行力）」が生まれる。

台湾姉妹校・港明高級中學との交流 (R7.12月)

岡山県立高梁高校

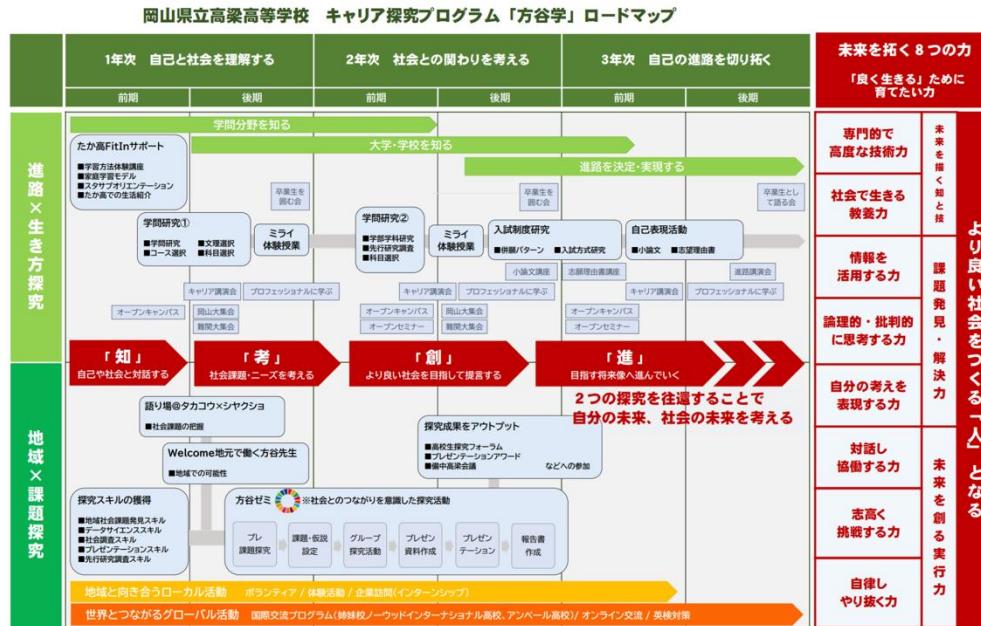
(普通科・家政科)



高梁高校の魅力化の取り組み（一部）

以前 → 地域にほぼ出ない調べ学習で終わる探究

探究学習のカリキュラムを大幅に改訂
進路と一体化した「キャリア探究・方谷学」に進化



大学入試の「総合型選抜」の成果にもつながる
将来の指向性を見つけることで、一般入試にもつながる

R6～文科省「DXハイスクール」に採択
探究学習でもデータサイエンス・統計等を盛り込む



海外の姉妹交流先を増やす
(台湾港明高級中学)



市議会への提案
(タカコウ×高梁市議会)



「探究」が生んだ学力の向上：『伸びる たか高』の実績

探究学習の変化

Before (2020)

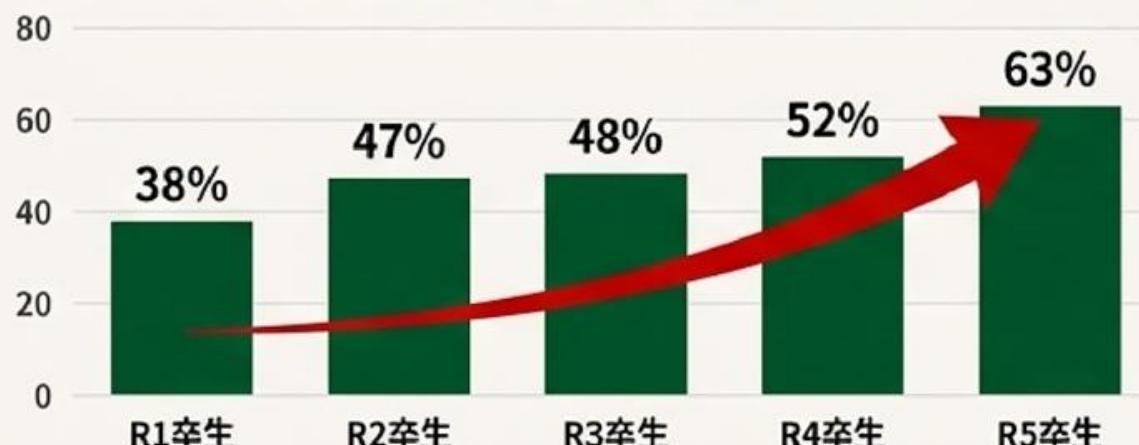
地域との連携はほぼゼロ。「総合的な探究の時間」は校内での調べ学習に留まる。

After (2022年度以降)

プログラムを大幅に改善。半数以上の班が地域に出て活動するよう。キャリア教育と一体化し、3年間一貫したプログラムに刷新。

データが示す成果

国公立大学合格者数割合の推移



入学時の学力レベルを超えた飛躍



過去20年間で最高の進路実績（2025年度卒業生）

難関国立大学

5名

大阪大学：2名
九州大学：1名
神戸大学：2名

岡山大学

16名

(普通科卒業生99名中)



高梁市 コーディネーター 配置前の課題と成果



校種の壁を越えて：市全体で育む「学びの生態系」

コーディネーターが小・中・高を行き来することで、学校間の情報交換が活発化。具体的な連携プロジェクトが次々と生まれ、市全体がひとつのキャンパスのようになりました。



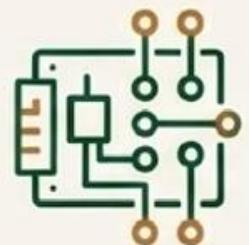
小学生 × 高校生

福地小学校が開発した「コハク糖」を、城南高校の「JonaCafe」でコラボ販売。



中学生 × 大学生

高梁中学校の姉妹校交流で、吉備国際大学の学生が制作した「マインクラフト高梁市」を活用。



中学生 × 高校生

城南高校電気科の生徒が、高梁中学校でプログラミングの出張授業を実施。



小・中・高連携

幻の鳥「ブッポウソウ」の保護プロジェクトに4校が連携。

全国的な評価



川面小学校：全国野生生物保護活動
発表大会で「環境大臣賞」受賞。



高梁城南高校：全国ユース環境活動
発表大会で全国大会に出場。

例：高梁市内の小・中・高・大のコラボ事例

福地小 × 高梁城南高校

福地小で開発「琥珀糖」を高校生カフェで販売コラボ



高梁中 × 吉備国際大

吉備国大のマイクラチームと姉妹校交流や防災でコラボ



高梁中 × 高梁城南高校

電気科でプログラミング授業を出前で実施
「ものづくり」の魅力を高校生が伝える



小・中・高の教員の合同研修

探究学習の合同研修、ソニー教育財団の後援による
リーダー育成コース（ミラアカ高梁）の共同実施など



例：小中高と地域団体（高梁野鳥の会）の「共助」のコラボ

高梁野鳥の会で中谷財団の助成金200万円を獲得
幻の野鳥「ブッポウソウ」の保護活動を小中高で連携して取り組む

高梁野鳥の会



川面小学校 全国野生生物保護活動発表大会「環境大臣賞」受賞、高梁中と協働



高梁城南高校「ユース環境活動大会」全国大会へ出場



【まとめ】高梁市 コーディネーター配置前の課題と成果

解決前: 高梁市が直面した3つの教育課題

県立高校が統廃合の危機



定員割れが続き、県の高確基準に堪へた。
特に高校城南高校は成内で最もリスクが高い状況
だったが、市役所に専門の実権担当者が不在だった。

学校と地域の連携が機能不全



教員の多くが校外活動者で地域との提供がなく、「総合的な授業の相関」も校内での調べ学習に偏り、活動が形骸化していた。

小・中・高・大の「縦の連携」が欠如



中学校教員が県内高校に多いマイナスイメージを持ち、生徒に校外の高校への進学を諦めるなど、学校間の問題が詰まっていた。

解決の鍵: 教育コーディネーターの役割と導入プロセス

コーディネーターに求められる3つの機能



- ①つなぐ(コーディネート機能)
学校と始発の場に立ち、双方の人材や資源を発掘し、マッチングさせる。



- ②引き出す(ファシリテート機能)
対話の場を創出・実行し、歩出者の主導性を引き出して合意形成へと導く。



- ③動かす(マネジメント機能)
行政や企業など多様な関係者を巻き込み、予算議論や組織設計をマネジメントする。



2020年12月～：
活動開始



2021年4月～：
探究学習へ参画



2022年4月～：
正式着任

ICT支援員として小学校での勤務を開始。同時に高校生のグラウンドファンディングを支援。

ボランティアとして高公高校の「探究的学習時間」に参画し始める。

高梁市から高賛資助を受け、「学校選考コーディネーター」として正式に活動を開始。

導入後の成果: V字回復を遂げた高梁市の教育現場

統廃合の危機を回避し、志願者数がV字回復



高梁城南高校は出願者数が126名に回復し、危機を脱した。

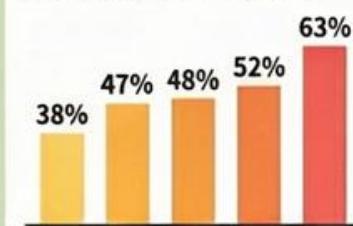
「総合的な探究の時間」が進化



高梁高校では、当初ほぼゼロだった校外での探究活動が、導入直後には学年以上の団体で地域に出て活動するまでに活性化した。

国公立大学合格率が追跡最高を記録

高梁高校では研究活動の充実に伴い進学実績も向上。県立大会出場率は5年間で36%から65%へと大きく伸長した。



高梁高校では研究活動の充実に伴い進学実績も向上。県立大会出場率は5年間で36%から65%へと大きく伸長した。

難関大学への合格者を多数輩出

2029年度卒業生:
大阪大学2名、九州大学1名
神戸大学2名
岡山大学16名など。
過去20年間で最高の進路実績を達成。

校種を超えた連携プロジェクトが次々と誕生



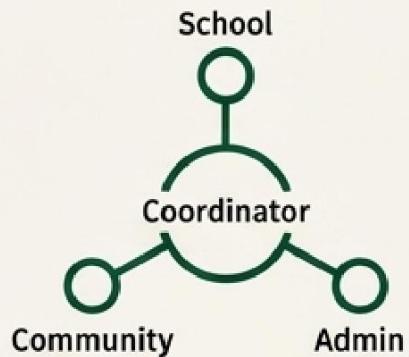
小学生が開拓した商品を高校生がカフェで販売したり、複数校が連携して環境プロジェクトが「環境大臣賞」を受賞するなど、具体的な成約事例が生まれた。



「環境大臣賞」
を受賞

高梁市モデルは、なぜ成功したのか？3つの成功要因

1. 専門ハブ機能



学校、地域、行政の間に立つ「唯一の窓口」、としてコーディネーターが存在。各ステークホルダーの負担を軽減し、信頼関係を構築しながら連携の摩擦を解消した。

2. 信頼に基づく有機的な成長



トップダウンの巨大プロジェクトではなく、ICT 支援員という現場の役割からスタート。実績を積み重ねることで信頼を得て、役割と活動範囲が自然に拡大していった。

3. 行政による公式な権限付与と支援



市の「プロジェクトチーム」設置や予算化、包括連携協定といった公式な後ろ盾が、コーディネーターの活動に正当性と推進力を与え、取り組みをスケールさせることを可能にした。